

6 塩害

い草栽培の適地の年間降水量は1,200-1,400mmと寡雨地帯である。い草の伸長期には高温で適当な湿度が望まれる。瀬戸内海沿岸の干拓地では海水が流入したり、また、塩分を含んだ水を灌水することがある。この場合の被害を左右する条件は塩水濃度・滞水後の気象条件である。

表13 塩分濃度と生育(日本い草技術協会 第7集)
熊本農試八代支場(昭和42-43年)

cl%	生育状況
0.8	植付後一旦は活着するが、色沢が青黒になり次第に枯死する
0.6	冬期は生育するが2月中旬頃より枯死するものが現れ、生育は続けるが伸長悪く、茎長70~80cm、粒茎太く使用不能。
0.5	塩分の限界、植付けて生育することが出来る。管理が極めて困難
0.2	深植のところで一部被害が見受けられたが、10a当り800kgの収量、茎長90~100cm

対策

- (1) 早期に退水を図る。
- (2) 水田内の用水路等から多量の真水を流し込んで、塩水の濃度を薄める。
- (3) 退水後できるだけ早く真水を散布し、い草に付着している塩分を早く除く。

干拓地での塩分濃度と生育についての土壌調査(熊本県)結果によると次のとおりである。
障害を受ける土壌要因として

- (1) 塩分濃度が高い。
- (2) 塩基含量が高くpHが概してアルカリ性である。
- (3) 地下水位が高く強還元の水田が多い。